

日本初の Trained nurse” 大山捨松の生涯と その時代の伝染病対策及び女子教育

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科教授

佐々木 秀 美

はじめに

大山捨松（1860-1919）はわが国初の Trained nurse” である。彼女は、会津藩一千石の家老山川尚江重固（1812-1860）の末娘として生まれ、戊辰戦争の悲惨さを経験した。戊辰戦争で敗れた松平容保（1836-1893）は1869年（明治2年）、松平家再興が許されたが、新しく与えられた土地は本州最北の不毛地帯であった。寒さと貧困生活の中で山川家は、捨松を北海道、函館の地に住む坂本竜馬（1836-1867）のいここにあたるという人物に預けた。北海道という地にあって開拓長官の黒田清隆（1840-1900）は幼き子女のアメリカ留学を進言した。その子女たちの一人に捨松が選任された。在米中、捨松はニューヘブンに設立されたコネチカット看護婦養成所で、看護婦の短期教育を受けた。同校は1873年（明治6年）にエール大学医学部教授であったフランシス・ベーコン（Francis Bacon 1831-1912）が、ナイチンゲール方式を採用して設立した看護婦養成所である。ナイチンゲール方式というのはフローレンス・ナイチンゲール（Florence Nightingale 1820-1910）が1860年（万延元年）に創設した聖トマス看護婦学校における教育方法である。過去に知ることが出来なかった学習をクリミアでの経験から学んだナイチンゲールは、戦地における兵士の生命は野営における包囲攻撃からの危険のみならず、健康のための原則が損なわれることによってもたらせられることを知った。ナイチンゲールは、人々の生存の問題と健康ニーズは国家が保障しなければならない正当な権利であると考えた。筆者の『ナイチンゲールイギリス陸軍を改革するー学習（経験）したことから学習せよ』¹⁾でも論じたようにクリミア戦争後の陸軍の改革は、ナイチンゲールとハリエット・マーティノウ（Harriet Martineau 1802-1876）との協働の仕事であった。そして、病院の機能を考えた場合、平時や有事の為に熟練した看護師の育成が病気状態からの回復に必要不可欠であると考え、1860年に看護師のための養成所を聖トマス病院内に設立した。アメリカも南北戦争後から訓練された看護師の必要性が論じられるようになり、実行に移された。捨松が学んだコネチカット看護婦養成所もこの時開設された。以降、アメリカでもナイチンゲール方式による看護教育が開始され、その波は明治維新を迎えた我が国にもたらされた。

そして、捨松は、高木兼寛（1849-1920）が、1885年（明治18年）に有志東京共立病院内に看護婦教育所を初めて設立した際に絶大なる貢献をした。看護婦教育所を設立した高木は、宮崎県出身であり、戊辰戦争の際には薩摩藩兵として東北征討軍に軍医として加わった。その後、鹿児島藩立開成学校に入学してイギリス人医師、ウィリアム・ウィリス（William Willis 1837-1894）に学んだ。1872年（明治5年）より海軍に出身し、1875年（明治8年）からイギリス、セント・トマス病院に留学した。1860年（万延元年）にイギリスでは、ナイチンゲールが看護教育を開始しており、高木が留学した年には、イギリス

連絡先：佐々木 秀美

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3

E-mail: hidemi@hbg.ac.jp

医学会からナイチンゲール方式による教育が認められ始めていた。帰国後、高木は東京海軍病院病院長を務めながら、1881年（明治14年）に成医会を結成、成医会講習所（現在の東京慈恵会医科大学の前身）を設立、1882年（明治15年）海軍省医務局長となり、脚気病対策に取り組んだ。彼は、1888年（明治21年）に我が国最初の医学博士となった。

他方の捨松は、帰国後、日本の女子教育が衰退していることに失望し、当時、陸軍大臣の職にあった大山巖（1842-1914）の求めに応じて結婚した。時代の中で、結婚という道を選択した捨松は、ベーコン家の娘のアリス・ベーコン（Alice Mabel Bacon 1847-1918）に宛てた手紙に、一緒に渡米した津田梅子（1864-1929）が結婚もせず、その高い能力に見合った職に就けないことをかわいそうと書いている。結婚後の捨松は、上流夫人たちで組織している婦人慈善会に所属し、“看護婦教育所設立の主旨”を高木に手渡し、看護教育設立のための財政的支援を行い、篤志婦人会のメンバーとしてその普及にも努めた。

『The Real Triumph of Japan』²⁾の著者で、アメリカの外科医、ルイズ・L・シーマン（Louis Livingston Seaman 1851-1932）が東京のある病院を訪問した時、“La Marquise Oyama”と書かれた名刺を差し出して病院の案内を申し出た一人の女性と出会った。彼女が差し出した名刺から大山公爵夫人であると知った。彼は、日露戦争中、満州の日本軍と行動を共にしており、同著には、維新後の日本の戦争を見聞した記録紙であると同時に、日本の医療の歴史を仏教伝来の時期から詳しく記述し、戦争中の野戦病院、日本の医療についても論じ、戦死者数や、病名や病人の数、病死者数と率にも言及している。そこで本論では、明治期初期の政治・経済的な動乱の時代に看護教育の推進に大きな助力をしたアメリカ帰りの捨松の生涯を概観し、捨松の生き方を通して、明治・大正期の伝染病対策や女子教育思想について検討する。

I. 大山捨松の生涯

1. 日本初の海外留学子女としての捨松

捨松については『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』³⁾、『情愛大山巖夫人伝』⁴⁾、『大山巖』⁵⁾等を参考にした。捨松は日本で初めてアメリカ留学をした5人の幼き子女の一人である。メンバーは、捨松（11歳）、永井繁子（1862-1928 8歳）、梅子（6歳）、吉益亮（1857-1886 16歳）、上田悌子（1855-1939 16歳）である。捨松は1860年（万延元年）、京都守護職であった会津藩一千石の家老山川尚江重固（1812-1860）の末娘として生まれた。山川家の屋敷は鶴ヶ城の近くにあった。戊辰戦争で山川家は事実上、戦いの真っ只中にあり、捨松も鶴ヶ城内にいて、その戦争の悲惨さを経験した。長男の山川大蔵（1845-1898 後に浩と改名）は戦後処理のために、謹慎中であった会津藩城主であり、京都守護職の任にあった松平親子と行動をともし、次男の山川健次郎（1854-1931）は藩命により脱藩、これからの新しい時代を生き抜く人材として学問の道に進んだ。1869年（明治2年）、松平家再興が許された容保が、新しく与えられた土地は本州最北の不毛地帯であった。

1871年（明治4年）、将来の日本の行く末を担う人物の育成には、母親になるべき子女の育成が重要であると考えた黒田北海道開拓長官は、幼き子女のアメリカ留学を進言した。少女達の渡米目的は彼の進言書には「それ開拓の要は、山川の形勢を察し、往来を通じ、土地の美悪を検し、培養を盛んにし、似て生を厚くし、俗を美するにあり、これをなすは人材に困る。人材を生ずるは師弟を教育するにあり、今や、欧米諸国は、能く子弟を教育するものと請ふ可しゆえに今、幼稚の女子を撰み、欧米の間に留学せしめん事を欲す。」⁶⁾に明白である。子を育てるのは母であり、母の教育がなければ優秀な子は育たない。その為にはまず女子を教育する事が大事であると考えられたものである。この黒田の進言によって実行されたのが、幼き子女のアメリカ留学である。

少女たちは岩倉具視（1825-1883）を団長とする使節団に同行した。捨松の幼名は咲子であるが、渡米前に捨松に改名、“捨てて待つ”という名前に幼くして異国に旅立つ娘を思う母親の悲しみとあきらめ、そして希望が込められた。当時の新聞報道には、皇后からアメリカに向けて出発する5人の子女への、はなむけの言葉が掲載されている。

「其方女子ニシテ、洋学修行ノ志誠ニ神妙ノ事ニ候、追々女学御取建ノ儀ニ候ハバ成業歸朝ノ上、婦女

ノ模範トモ相成候様心掛」⁷⁾

皇后の言葉にあるように、彼女達がこれからの日本の教育を担う女性達の模範になるよう求められた。この時、幼きながらも捨松には官費留学生の一人として、日本のために役立つ人物になることを誓ったことであろう。皇后の言葉を深く心に刻んだ少女達は不慣れな外国の生活に順応した。但し、吉川利一著の『津田梅子伝』⁸⁾によれば年長であった吉益亮と上田悌子の両名は、慣れない外国暮らしで不適応を起こしたとみられ、10ヶ月足らずで早期帰国した。

捨松はニューヘブンのレオナルド・ベーコン (Leonard Bacon 1802-1881) という牧師の家にホームステイし、伸びやかに育った。長じるにつれ、しなやかで若い心はアメリカの文化を吸収した。英語も流暢になり、逆に日本語を忘れるほどであった。“ヒルハウス・ソサエティ”という貧困の女性たちや子供たちに救いの手を差し伸べることが目的の会があった。彼女はその会のメンバーとしてボランティア活動を行ったりした。アメリカでの生活は、自由で生き生きしており、後の婦人慈善会のメンバーとしての原動力になった。ボランティア活動はアメリカでは極自然のことであった。そうした環境にあって捨松は帰国直前にキリスト教徒になっていた。

加えて、捨松は年少であった梅子の学業修了を待つ間、ニューヘブんに設立されたコネチカット看護婦養成所で、看護の短期教育を受けた。捨松がこの学校で受けた教育は衛生学の基礎知識や技術訓練であり、その他に調理場での実習があった。医師によって処方された患者食を作ったり、床洗いをしたり、力仕事をしたりしている。こうした仕事にはあまり関心を抱かなかった捨松であったが、看護の仕事には感銘を受けた。この経験が後の慈善会の組織づくりや、看護婦養成所の必要性を説いたりすることにつながったのであろう。先述したように同校は、ベーコン牧師の次男であるフランシスが、1873年(明治6年)にナイチンゲール方式を採用して設立した看護婦学校である。フランシスの妻ジョージアナ・ウールセイ・ベーコン (Georgeanna Woolsey Bacon 1833-1906) は非常に積極的な女性であり、若いころから政治や社会問題に関心をよせ、強烈な奴隷制度反対論者であった。南北戦争中に彼女は献身的に傷病兵の看護にあたり、野戦病院を訪問したりしている。ちなみに、この南北戦争の際、ワシントンの陸軍省よりナイチンゲールに対して、病院の組織と負傷兵の看護についてアドバイスを求めてきた。ナイチンゲールのクリミアにおける兵士の状況改善に関する記事は、マーティノウを通じてアメリカに配信されていた。マーティノウは英国の女流小説家、経済学者であり、デイリー・ニュースの主筆をしていた。彼女は、情報や知識を小説の形で出すことを思いつき、数多くの物語を書いて、政治・経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得たとされる。1861年(万延2年)、マーティノウからナイチンゲールに宛てた手紙によれば、彼女たち二人の共同の仕事『イングランドおよび彼女の兵士たち (England and her Soldiers)』はアメリカの医学雑誌に掲載され、繰り返し読まれているとのことであった⁹⁾。アメリカの陸軍大臣サイモン・キャメロン (Simon Cameron 1799-1889) からナイチンゲールに宛てた手紙には、ナイチンゲールの文書が非常に熱烈に受け入れられた¹⁰⁾と記述されている。

『看護・医療の歴史』にはドロティア・リンド・ディクス (Dorothea Lynde Dix 1802-1887) が、1861年(万延2年)6月10日付けで陸軍大臣から陸軍看護師部隊の編成補充の権限と資格が与えられたと記述されており、4月30日付けで陸軍大臣の奉仕活動の許可証が与えられた¹¹⁾。アメリカの婦人慈善家で狂人の天使とも呼ばれたディクスは、看護師としてのトレーニングの経歴はなかったが、精神病患者の処遇改善、過去の慈善事業で巧みな組織力を持ち、監獄、養老院、白痴院の建設改良に努力したことが評価された。その足跡はアメリカの各州及びヨーロッパの各国に及んだ。日本にも当時の森有礼(1847-1889)ワシントン駐在代理大使を動かし、白痴院(精神病院)を建設したという事実がある。また、マーティノウはナイチンゲールへの手紙でディクスについても触れ、精神障害者のケアをしている女性であると説明を加えると同時に、アメリカ人の素晴らしい感性について触れつつ、ディクスについて大きなエネルギーを有した女性である¹²⁾と評価している。南北戦争中、献身的なシスターやボランティア達の活動によって傷病兵の看護が成されていた。この中には、アメリカ赤十字社の設立者で、看護師のパイオニアであるクララ・バートン (Clara Barton 1822-1912) なども含まれた。

ディクスの部隊で看護に当たったジョージアナは、「初めから見ていない人には、これらの看護女性がどんなに多くの反対と悪意、そして薄情に耐えねばならなかったかを分る人はいるまい」¹³⁾と述べ、

自分たちがいかに軍医たちの荒々しさに耐え、様々な障害を克服しなければならなかったかについて述べている。南北戦争中に従軍したアメリカ女性達は、ナイチンゲールがクリミア戦争で経験したような問題に直面したことになる。熱意はあるが有資格者ではない女性達と協働する、荒々しく苛立ちを隠せない軍医たちによる劣悪な医療体制がそこにはあった。アメリカもまた、この戦争の経験を通して、平時から女性達に看護に関する教育をすることの必要性を感じ、その事によってより良い看護が実践されるというナイチンゲールの考え方を理解するに至ったのであろう。ジョージアナが1879年（明治10年）に書いた『Hand Book of Nursing 家庭および一般向け看護のためのハンドブック』¹⁴⁾は病院や看護学校のバイブルとして愛用された。同著は高木もイギリスから帰国の折に持参しており、有志共立看護婦教育所で活用されたと考えられ、慈恵医科大学図書館に所蔵されている。しかし、時代は大きく変わりつつあった。出国時に頂いた皇后の言葉を胸にアメリカで教育を受け、帰国後は日本の女子教育に貢献できることを切望していた捨松は、日本の女子教育が衰退していることに失望した。ナイチンゲール同様お国のための意識が顕著であったと考えられる捨松は、アメリカで得た知識を日本の女子教育に還元することが困難であると感じた。捨松は、結婚をするという大きな決断をし、当時、陸軍大臣の職にあった大山の求めに応じて結婚した。皮肉なことに戊辰戦争で会津が攻撃されていた時の総大将は夫になった大山であった。結婚後の捨松は、上流夫人たちで組織している婦人慈善会に所属し、“看護婦教育所設立の主旨”を高木に手渡し、看護教育設立のための財政的支援を行い、篤志婦人会のメンバーとしてその普及にも努めた。

2. 大山巖夫人としての捨松

1881年（明治15年）、梅子の学業修了を待って日本に帰国した捨松は、ナイチンゲール同様お国のための意識が顕著であった。出発前に皇后から授かった言葉を胸に日本の女子教育の未来に役立つ女性になりたかった。ところが日本の女子教育も大きく後退し、学制発布の頃の男女平等の教育の気風は薄れ、むしろ、男女別教育が推進されていた。アメリカ留学の時とは違う日本のお国事情がそこにはあった。自身に課せられた役割として日本の子女に教育を施すことが困難であると感じた捨松は、明治維新の立役者である西郷隆盛（1828-1877）の従兄弟の大山陸軍大臣との結婚を決意した。捨松がアメリカで滞在中、友人であったアリスに宛てた手紙には「ある政府の高官から結婚の申し込みを受けたことを以前にお話したのを覚えていますか。その方からもう一度結婚の申し込みを受けたのです。私はこの結婚を真剣に考えています。現在のところ、私が就職できるような仕事はまったくありません。教えることだけが今の日本が必要としていることではないと思います。今一番やらなければならないのは、社会の現状を変えることなのです。日本では、それは結婚した女性だけができることなのです。言い換えれば、教えることだけが日本を救う唯一の方法ではないということです。もし、私に教えることができないならば、日本にとって私はまったく役に立たないことになります。』¹⁵⁾と書いている。同じころアメリカ留学を果たした兄、健次郎には帰国後、すぐに教育の場と機会が準備されていたのに、捨松、梅子らには何もなかった。健次郎は1871年（明治4年）アメリカに留学、1876年（明治9年）から開成学校（現東京大学）に奉職、1879年（明治12年）東京帝国大学教授、1888年（明治19年、理学博士の称号を得た。同時に彼がわが国最初の博士号取得者であり、1901年（明治34年）、東京帝国大学総長として事実上、わが国の学術的分野の推進役として不動の地位まで上り詰めた。日本の社会が大きく変化していたのである。悩んだ末の苦渋の選択であったが、捨松は自分自身のためにもと書いているから、結婚することがお国のためであると同時に自身の幸福のための選択であると考えたのであろう。なお、梅子は帰国後、やはり仕事がなく、苦悩と孤独の日々を送っていた。伊藤博文（1841-1909）は梅子を気の毒に思い、官邸に住ませ、妻や娘の英語教師をさせた。

1884年（明治17年）にアリスに宛てた手紙には「まだお知らせしていませんでしたが、私は最近新しく作られた病院を援助するためにバザーの準備をしています。日本では慈善バザーは今までに一度も開かれたことがなく、今回がはじめての試みです。残念ながら日本人は慈善事業についてまったく何も知りませんでしたが、皆さん私のアイディアにとっても賛成してくださり、今では東京中がこの話題で持ちきりです。このバザーは女性それも上流階級の婦人や令嬢だけの手によって運営されます。約150人の女

性たちが奉仕すると約束してくれました。これは大変なことだと思います。慈善バザーなど今まで誰も考えつかなかったので、私のアイデアがどんなに世間を驚かしたかあなたには想像もつかないでしょう。」¹⁶⁾と書かれている。

アリスという女性は親の影響で小さい頃から人種問題に関心を持ち、12歳の時に黒人達の教育に一生を捧げる決心をした。勉強家であったアリスは独学でハーバード大学の検定試験に合格、ハンプトン師範学校の正規の教師になっていた。アリスは自分の教え子が黒人であるがために看護婦養成学校への入学が拒否されたことを知ると、東部の人たちから寄付を集め、ハンプトンに病院を建てて、その中に看護婦養成所をつくるといった積極的な女性である。ちなみにアメリカ初の黒人看護師はマリー・エリザ・マホニー (Mary Eliza Mahoney 1845-1926) である。マリーは偏見を経験しながらもその優秀性を発揮した¹⁷⁾。アリスは1888年(明治21年)来日、梅子と生活を共にしながら華族女学校(現学習院)の教師及び梅子の英語塾の教育に協力した。

その後の日本は日清・日露戦争を経験した。捨松は家庭内にあっては子供たちを厳しく教育し、国内にあっては上流夫人たちによる日赤篤志看護婦婦人会を組織し、看護師のイメージアップを図ったり、病院でボランティア活動を行ったりした。日赤篤志看護婦婦人会は、看護婦の重要性が認められていないときに有栖川宮妃董子(1855-1923)を中心に有志の貴婦人がこれに参加して、簡単な看護教育を受けた後、看護師と同じ服装を着て補助業務に当たり、戦時には傷病軍人の慰安などを行った。董子は、夫と共に佐野常民(1823-1902)らを助けて博愛社(後の日本赤十字社)の創設に尽くしたことで知られる。捨松はまた、1901年(明治34年)に結成された愛国婦人会という組織などを活用して積極的に救護活動を行った。愛国婦人会は、戦死した兵隊の子供や未亡人の世話をする会であると捨松自身が説明している。そして捨松はこの会の理事をしていた。捨松は、日清戦争中、篤志看護婦婦人会の幹事長小松宮彰仁親王頼子妃(1852-1914)が、広島陸軍予備病院や呉海軍鎮守府病院などを訪問する際、同行した¹⁸⁾。『呉海軍病院史』¹⁹⁾には、皇太子や皇后陛下等の皇族方、華族の方々が訪れたと記載されているが、捨松等の個人名は特に記載されていない。

捨松は、「今日は戦争で戦っている兵士たちを慰めるためなら、自分のもっている物を全部あげてもよいという気持ちであふれています。東京はもちろんのこと、日本のどんな小さな町にも委員会が作られ、兵隊の留守家族を援助するために募金が集められています。そのお金で、生活に困っているたくさんの留守家族が救われました。日本赤十字社の会員の婦人たちは、毎日病院に行き包帯作りをしています。私も時間の許すかぎり病院に行き、朝の9時から午後4時まで働いています。皆、看護婦の制服を着て、手や服を消毒してから仕事をはじめます。陸軍は防腐処理に関してとても厳しく、処理をしていない包帯は絶対受け取らないからです。今までに数百万本以上の包帯を作りましたが、まだ足りません。」²⁰⁾と書いた。

彼女は自分自身が役に立つことならどんなことでも協力をしたいと考え、行動を起こしていた。アメリカの外科医、シーマンが病院を訪問した時、興味深い出来事があったと著作『The Real Triumph of Japan』に記述している。それは、「La Marquise Oyama」²¹⁾と書かれた名刺を差し出して病院の案内を申し出た看護師の服装をした一人の女性と出会ったことである。彼女が大山公爵夫人であると知ったシーマンは捨松の印象を、流暢な英語と彼女の優しい対応に感動したと述べている。彼は日露戦争中、満州の日本軍と行動を共にしており、同著は、維新後の日本の戦争を見聞した記録史である。著作の中で彼は、日本の医療の歴史を仏教伝来の時期から詳しく論じ、戦争中の野戦病院、日本の医療状況、脚気等、戦死者数や、病名や病人の数、病死者数と率までも言及している。先述したようにアメリカの陸軍省もナイチンゲールのアドバイスを受けて陸軍の看護部隊を編纂したが、それでも無資格者ばかりであった。その反省からアメリカでは看護教育の必要性が論じられ、ナイチンゲール方式によって看護教育が開始された。日本でも日清戦争で初めて訓練された看護師が戦地の傷病兵の看護に当たった。シーマンの著作にはこの辺りについては詳しく論じられていない。戦時中の医療状況は先述したが、中でも戦争中の参謀・戦略の中核にあった元帥大山について度々、登場させている。捨松は、夫が外地で従軍中、看護教育普及も込めて、病院での活動を積極的に展開していた。彼女は当時の日本女性としては非常に知的で活動的な女性であった。日本の女子教育に役立ちたいと考えていた捨松は、縁あって看護の教育を受け、

帰国後に結婚した夫の職業柄、傷病兵の看護に関心を持ち、兵士たちの家族の心配をしたりする為の組織作りまで行った女性であった。

3. 看護教育開始への提言と協力

看護の発展は戦争と密接につながっている。少なくともナイチンゲールが看護教育を開始したのもクリミア戦争における戦場の悲惨さを経験したからであり、クリミア戦争後に、ナイチンゲールが行った陸軍の改革や看護教育の開始は、彼女の人道主義的立場から成されたものである。日本でも明治初期からアメリカン・ミッションの女性宣教師等から看護教育を開始するべきとの意見も出始めていた。そうした中で初めて看護教育を開始したのは高木であり、開設に向けての提言と財政的支援を行ったのは婦人慈善会である。そのメンバーの一人であった捨松はアメリカで看護教育を受けた日本女性として初めての Trained nurse” である。婦人慈善会は看護婦教育所設立要望を高木に手渡し、看護教育設立のための財政的支援を行った。

『高木兼寛伝』^{22), 23)}によれば、高木は宮崎県下級武士の出身であるが、医学を志し、医師になった。しかし、彼は戊辰戦争に医師として参戦したが自分の医師としての力のなさを悟り、医学の再教育を決意していた。折りも折り、彼は薩摩に医学所が設立されることを知った。薩摩の医学所というのは現在の鹿児島大学医学部の前身である。薩摩の医学所には英国公使館付きウィリアム・ウィリス (William Willis 1837-1894) が、鹿児島医学校の校長に就任することになっていた。ウィリスは、江戸幕府時代の医学所と合併して医学校兼大病院となった1869年 (明治2年)、大病院の院長に就任、診療の傍ら学生に講義を行った。院長以前のウィリスの野戦病院における診療の評価はすこぶる良好であった。が、将来の日本の医学界を引っ張って行く指導者としての彼の手腕には疑念の声が高く、新政府はドイツ医学を採用する事に決定し、彼の職を解いた。ウィリスは西郷との親交が厚かった為、1869年 (明治2年)、薩摩藩が建てた医学所に誘致され、同年12月に薩摩に赴いた。1869年 (明治2年)、高木は、ウィリスが、鹿児島医学校の校長に就任後、同医学校の第一期生として入学した。彼はウィリスに師事した後、1873年 (明治6年) に、海軍病院内に海軍医学校が新設されたのを契機に鹿児島から東京に招集された。当時、東京の海軍医学校には、イギリスの聖トマス病院医学校の出身者であったウィリアム・アンダーソン (William Anderson 1842-1900) が教授として招かれていた。そして、アンダーソンの推薦によって1875年 (明治8年)、聖トマス病院医学校へ留学した。高木の留学目的には第一に自身の意思としての能力向上と共に、日本の医学水準の向上にあり、看護教育には関心がなかったと考えられる。しかし、高木は聖トマス看護婦養成所を熱心に視察し、写真を撮るなどの情報収集を行っている²⁴⁾。そして、帰国の折にはナイチンゲールの著作『看護覚え書』²⁵⁾も手に入れた。

ナイチンゲールの著作『看護覚え書』はその序言に書いてあるように、職業としての看護婦のみならずすべての女性を対象に書かれたものである。この著作は実務的ではないが、しかし、人々の健康ということについて、より普遍的な要素を盛り込んでいる。換気と暖房、住居の健康、小管理、騒音、変化、食事、食物とは、ベッドと寝具類、陽光、部屋と壁の清潔、体の清潔、お節介な励ましと忠告、病人の観察といった内容は、家庭の中で主婦が家事管理、すなわち、住居、寝具、衣服、食事、病人の世話といった事を、健康的な生活概念から平易な言葉で論ずる様に優しく述べたものである。それは上流社会の婦人らしく静かで、きめの細かいものである。又、病気で床に伏せる事を余儀無くされた人の精神作用を深く考慮した上で、その看護法についても述べられている。

高木が留学した頃の日本は英米主導型であったが、帰国した時の国内の状況は一変していた。留学中の1877年 (明治10年)、西南戦争が起き、政治の体制も変っていた。国内ではキリスト教主義的思想から儒教主義思想への転向が繰り返し主張されていた。政局の混乱の中、外地との交流で伝染病も多かった。シーマンの著作にも記述されたように、軍隊では脚気 (beri-beri) が多くその予防と治療が行われなければ戦力にもならない状況であった。東京における脚気の発生状況は、エルヴィン・フォン・バルツ (Erwin von Balz 1849-1913) や高木の論文によって世界に発信されていた²⁶⁾。この時期起きた“脚気論争”は、小説家森鴎外としての方が有名な陸軍軍医森林太郎 (1862-1922) の細菌説と食事説を唱えた高木との論争である、脚気の問題は後に農学者の鈴木梅太郎 (1874-1943) が脚気の原因としてビタミ

ンBIを発見してその不足が脚気になるという見解を示すまでは、高木の論説の方が正論であるとの確証は得られず中傷的であった。

1879年（明治12年）には“法定伝染病”が指定され、翌、1880年（明治13年）には“伝染病予防規則”ができた。しかし、衛生状態は悪く、国民は病や貧しさと闘っていた。こうした劣悪な状況の中で、高木は1882年（明治15年）、伝染病患者を収容するために設立されていた東京府病院の一部を借用して民間病院である有志共立東京病院を開設した。しかし、病院の経営状態は良くなかった。彼の活動が天皇の元に届き6,000円の御賜金をいただいた。これと同時に婦人慈善会は有志共立東京病院に対し財政的支援をおこなった。婦人慈善会のメンバーの一人であった捨松は、政府高官の夫人たちと、設立されたばかりの有志共立東京病院を参観する機会があった。コネチカット看護婦養成所で、看護婦の教育を受けた捨松は、有志共立東京病院で病人の世話をしているのが、無資格の看護人ばかりなのに驚いた。彼女は同病院の院長であった高木になぜ、看護に女性を使わないのかと質問したという。捨松は看護師という職業が欧米社会では高く評価され、人々から尊敬されていることを説き、日本における看護師の育成に深い関心を向けさせた。

続けて婦人慈善会は、西洋における看護教育の実情を知ると、わが国でも看護教育の必要を感じた。そこで彼女達はイギリスの留学を終えて帰国した高木に、看護教育開始の要請を行ったのである。婦人慈善会の要請に対して高木は、看護婦教育の必要は感じているが、財政的な基盤がないことを述べた。彼に看護婦教育の意志がある事を確認した婦人慈善会は1884年（明治17年）、第一回バザーを催した。捨松の手紙によれば、伊藤博文夫人梅子（1848-1924）、井上馨夫人武子（1850-1920）、森有礼夫人寛子（1864-1943）、梅子、そして宮中で女官をしている捨松の次姉の山川操（1852-1930）を含めた6人がバザーの準備委員であった。そして、バザーは有栖川宮熾仁親王御息所薫子を総長に、威仁親王妃慰子（1864-1923）を副総長、会頭に捨松、副会頭に伊藤梅子、井上武子、森常子等によって推進された。彼女たちは“レディス・フェア”と銘打って盛大なバザーを行い、寄付金を集めた。バザー会場で彼女達は次のような“看護婦教育所設立の主旨”という文書を、バザーの参加者に配布し、協力を求めたのである。彼女達の文書には「若シ不幸ニシテ疾病ニ罹ルトキハ速ニ来レ之ヲ驅除シテ全快センコトヲ望ムハ人情ノ免ザル所ナリ今ヤ其意ヲ果サンニハ良医ヲ聘シ其指図ヲ守リ看護ヲ尽クスニアリ然ルニ医師ノ処方ヲ詳ニシテ之ヲ行ハ実ニ容易ノ業ニアラズ為ニ往々之ヲ誤ル者尠カラズ故ニ医師ハ術ニ巧ミナリト雖（イエド）モ看護宜シキヲ得サルヲ似テ奏効セサル者多シト殊ニ重病者ハ必ス医師ニ対シ其容体ヲ精密ニ告ケ得ル看護者ヲ要スルモノナリ若シ其設ケナケレバ病症ノ経過等不明且9薬餌ノ授与等ニ誤リ勿ラシメンニハ之ニ相当ノ教育ヲ受ケタル者ニ非ラサレハ能ワサルガ故ニ海外諸国ニ在テハ看護婦教育所ノ設ケアリテ之ニ充ツト云フ然ルニ本邦ニ於テハ未ダ其設ケナク実ニ聖代ノ欠典ト謂フベシ」²⁷⁾と書かれた。文書には家族に病人がでたとき、看病をする人がいないことを憂い、もし、不幸にして病気になった場合、医師の力は大きい、看護の力を借りればそれにもまして病気の回復を効果的に促進することが出来ると書かれた。そして、外国には、病人の看護をする者の教育を行う看護教育所というのがあると聞く。日本でも看護教育所を設立し、看護婦養成をすることが日本の医療にとって重要であると説いた。上流婦人のパーティーの繰り返しを無為に感じていたナイチンゲールとは逆に、わが国の上流婦人達は社交の場を資金づくりに利用したのである。そこには少なくとも西洋における博愛主義的な心遣いが全くなかったとは言いきれない。猿真似とも言われた上流夫人達が、バザーという労働報酬で得られた資金によって看護教育を始めようと計画したわけである。この鹿鳴館でのバザーの収益金は6,364円にもなった。彼女達はこの寄付金を有志共立東京病院に寄付し、看護教育開始の為の基金とするよう高木に依頼した。資金援助を得た高木は、ナイチンゲールが実際設計した聖トマス病院と同じようなバビリオン方式によって実習病院的性格を持たせた病院を設立した。そして、ナイチンゲールが行った教育方法を参考に、1885年（明治18年）有志東京共立病院内に看護婦教育所を開設した。

ナイチンゲール方式に従えば、看護の教育には優れた設備を有した病院が必要であった。彼女は、当時のイギリスに建築されていた病院の構造上の欠陥を『病院覚え書』²⁸⁾で指摘し、バビリオン方式という院内感染予防が期待できる建築法を用いた。感染症の多い時期、病院が病院としての機能を果たすためにどうしても建築上の問題を追及しておく必要があったのであろう。ナイチンゲールは基本的に新鮮

な空気と明るい陽光が健康の回復には必要であると考えており、パビリオン方式は空気の流通と日当たりの良さをねらいとした建築法である。ナイチンゲールは、その建築法で移転が予定されていた聖トマス病院をパビリオン方式で再建築した。ナイチンゲール時代の聖トマス病院は第二次世界大戦によって崩壊したとのことであるが、聖トマス病院は今なお、テムズ河沿いにある反対側には勇壮なウインチェスター寺院や内閣総理府など重要な建物がある場所に立地している。

寄付金によって設置された有志東京共立病院看護婦教育所では、1859年（安政6年）からキリスト教伝導目的で来日していたジェームス・カーティス・ヘボン（James Curtis Hepburn 1815-1911）の協力を得、1881年（明治14年）から宣教目的で来日しており、アメリカでナイチンゲール式看護教育を受けたとされるリード女史（Mary E. Reade）を講師に招き、その教育に当たらせた。これがわが国で最初の看護教育の始まりである。看護のテキストには『The Hand Book of Nursing』が使われたと考えられる。慈恵医科大学図書館には『The Hand Book of Nursing』が所蔵され、著作の巻末には、ロンドンの一文字がある。高木は、先述した『看護覚え書』同様、帰国の際に持ち帰ったのであろう。その巻頭言には“From President Woolsey”と書かれ、最後に“Theodore D. Woolsey”とサインされている。テオドール・ウールセイ（Theodore D. Woolsey 1801-1889）という人物は、19世紀におけるアメリカの知識人の典型的な人物であり、ラテン語や古典文学に通じていた。彼は神学も専攻したが、次第にそれらの学問から離れて近代的な学問に転じたとされる。1831年（天保2年）にエール大学のギリシャ語とギリシャ文学の教授となり、1846年（弘化2年）にそこの学長になった。彼は1871年（明治4年）に学長を辞任したが、その後、1885年（明治18年）までエール大学の理事会のメンバーとしてその活動を行った²⁹⁾。従って、『The Hand Book of Nursing』の巻頭言を書いた Woolsey という人物は、おそらく、ジョージアナ・ウールセイの兄もしくは弟のことであると考えられる。次に著者は委員会と書かれているが、『鹿鳴館の貴婦人、大山捨松』には、著者はコネチカット看護婦養成所を設立したベーコン教授の妻であるジョージアナという女性と同様の本を書いたと記述している。ベーコン教授の妻は先述したジョージアナ・ウールセイという女性であり、略歴からはほぼ同一人物であると考えられる。

『The Hand Book of Nursing』の内容は家庭及び一般向けとしながらも、第一部、内科－外科の看護、第二部、産科看護の方針、第三部、家族の衛生といった疾患別看護の構成であり、臨床中心の看護である。病院での実務的な業務即ち、各種清拭方法、各種与薬方法、疾患別看護法であり、いかに病人を看護するかということがその著作の内容である。東京慈恵医院看護婦教育所の教育はこの本を中心に行われた事が考えられる。最後に『The Hand Book of Nursing』には“What your duty is to the doctor”という項があり、この中に医師の指示に従うことが述べられるとともに、患者の日々の変化を注意深く観察し、記録するように義務付けられている。しかし、医師の治療に関するどのような問題であっても決して討議してはならないと書いている³⁰⁾。アメリカにおける初期の看護書が『Trend In Nursing History』³¹⁾に紹介されているが、その一つにコネチカット看護婦養成所のテキストとして使った『The Hand Book of Nursing』がある。同著は家庭及び一般向けのためのハンドブックとされるが、長い間アメリカの病院や看護婦達のバイブル的存在であったと記述されている。

イギリスの開始から25年、アメリカの開始から8年遅れて日本でもナイチンゲール式看護教育が始まった。日本における最初の看護教育開始は捨松の並々ならぬ情熱が結実したものであり、以降、ナイチンゲール方式によって看護教育所が次々と設立された。1886年（明治19年）桜井女学校内の女性宣教師であるメアリ・ツルー（Mary True 1840-1895）によって、同年、京都にも宣教医ジョン・カッティング・ベリー（John Cutting Berry 1847-1936）の要請によってキリスト教主義思想による看護学校が京都同志社大学内に京都看病婦学校が設立された。また、1888年（明治22年）桜井女学校附属看護婦養成所の実習を引き受けた医科大学付属病院（後の東京大学附属病院）が帝国大学付属看護法講習科を設立、1890年（明治23年）には日本赤十字社内に看護婦養成所が設立された。この様にナイチンゲールが存命中にわが国にも彼女の教育方式が紹介されたのである。ナイチンゲールは知性・倫理的行動・情熱を有した女性が優れた看護師であると述べたが、捨松こそはナイチンゲールの述べる理想的な女性、あるいは看護師の典型であり、わが国の看護教育設立に多大な貢献をした人物である。

しかし、西洋風流儀を早く取り入れた女性達は、洋風かぶれとして非難される事が多くなった。看護

教育設立に向けた善意の活動とは言え女性が、しかも既婚者である女性が行う社会的な活動や、鹿鳴館における仮装舞踏会などが国粋主義者たちを刺激し、絶好の攻撃材料になったのも事実であった。目的はともかくとして鹿鳴館で夜毎繰り広げられる、洋風の華やかな雰囲気のある仮装舞踏会などは、儒教主義的な質素堅実な女性像から考えると、うわついた軽薄な態度として受け止められたのであろう。鹿鳴館は当時、外務卿であった井上馨（1835-1915）の提案によって建築されたものである。著作『鹿鳴館』³²⁾によれば、「日本が国際上、不利益を蒙っているのは全て条約の不備によるものであり、これを是正して対等の条約を結ばなくてはならないが、それには法律、制度などを整えることとともに、日本の文明が欧米諸国のそれと同水準でなくてはならない。」³³⁾と考えられ、文明の促進が大切であるとの考えにいたった。条約の不備というのは1857年（安政4年）に締結された安政の五カ国条約のことであり、治外法権の問題も含めて不平等条約とも言われている。井上はその法改正を考えていた。そのため、彼は国際交流の場としてあるいは社交場としても活用できる建築物を計画したのである。井上の構想によって外交の館がイギリスの建築家ジョサイア・コンダー（Josiah Conder 1852-1919）によって設計され、1883年（明治16年）に落成式を迎え、鹿鳴館と命名された。磯田光一著の『鹿鳴館の系譜』には「鹿鳴館がどう批判されようと、それは生まれたばかりの近代国家がやむなく試みなければならなかった化粧であった。悲哀をこらえて、無理な背伸びをしようとする健気な志なしに、あのような建物が東京に建てられるはずはなかった。」³⁴⁾と記述されている。西洋諸国と対等にと考えられて建築された鹿鳴館ではあったが、そこで催された西洋風の流儀と踊りは猿真似とまで言われ、一つの悲哀さえ感じられる風景がそこにはあった。

Ⅱ. 大山巖夫人としての捨松

1. 捨松の夫—大山巖

家庭人としての捨松を論じる前に、捨松が結婚した大山巖という人物は如何なる人物か？『大山巖』³⁵⁾によれば、大山は、薩摩藩士・大山綱昌（通称 彦八 不詳-1856）の次男として生まれた。幼名は岩次郎。通称は弥助。父親の綱昌は西郷隆盛（1828-1877）の父、西郷吉兵衛（1806-1852）の弟で大山家に養子となり、大山姓に変わった。ゆえに、血縁関係で言えば大山は西郷の従兄弟にあたり、幼時から“兄さあ”と呼んで西郷にまわりつき、彼の思想的な影響を大きく受けた。明治維新に向けての薩摩藩の動向は周知のことであるが、政府高官となっていた西郷が参加する会議には常に同席していた大山は、西郷の思想的影響を存分に受けた。長じてからの大山は有馬新七（1825-1862）という同藩の者らに影響されて過激派に属した。1862年（文久2年）の寺田屋騒動では公武合体派によって鎮圧され、大山は帰国謹慎処分となる。薩英戦争に際して謹慎を解かれ、砲台に配属された。

ここで西欧列強の軍事力に衝撃を受け、幕臣・江川英龍の塾にて、黒田らとともに砲術を学んだ。戊辰戦争では新式銃隊を率いて、鳥羽・伏見の戦いや会津戦争などの各地を転戦した。また、12ドイム臼砲や四斤山砲の改良を行い、“弥助砲”と称され、後の日露戦争まで長く使用された。会津戦争では薩摩藩二番砲兵隊長として従軍した。鶴ヶ城攻撃初日、大手門前の北出丸からの籠城側の射撃で攻略に手間どり、佐藩部隊の援護に出動するも、弾丸が右股を内側から貫き負傷し、翌日後送された。この時の会津若松城には、のちに後妻となる捨松とその家族が籠城していた。

維新後の1869年（明治2年）、大山は渡欧して普仏戦争などを視察した。1870年（明治3年）から6年間はジュネーヴに留学した。留学中の1874年（明治4年）に友人の吉井友実（1828-1891）から、西郷の征韓論発言の手紙を受け取って仰天した。しかし、「征韓論の危険性を理解できる国際的な視野を持っていて、軍政府の高官でなかつ、西郷から好かれている人物と言えれば大山しかない」³⁶⁾という事で帰国命令が時の太政大臣三条実美（1837-1891）と右大臣岩倉から出され、1877年（明治7年）途中帰国し



画像1 著作 大山巖より

た。結局、西郷の説得に失敗した大山は、西南戦争では政府の命令で相次ぐ士族反乱を鎮圧のため、薩摩に赴いた。戦いの前日、西郷を説得するべく西郷宅を訪問した大山は、西郷の目に驚いた。その目はあまりにも澄んでいて眼底は慈悲深い谷のような温かさに満ちていた。西郷は維新後に夢見た現実の国内の争いに失望し、自身が死ぬことで国家の政情を安定させることができるとの確信を持ち、大山の説得にも関わらず、政府の高官として戻ることを拒んだ。そして、城山に立て籠もった西郷を相手に大山は戦った。結局、圧倒的な兵力で大山は西郷軍を打ち破り、西郷は自決した。大山は、西郷を助けられなかったことを生涯悔やんだ。後に、上野の森に西郷の銅像が建立されてからは、その銅像に向かって自身の悩みを打ち明け、西郷からの声なき答えを得ることが常であった。大山はこれ以降、鹿児島には戻らなかったが、西郷家とは生涯にわたって親しくし、特に西郷の弟の西郷従道（1843-1902）とは親戚以上の関係を継続した。彼も又、西郷軍には関わらなかった人物である。

日本は1877年（明治10年）に偉大な政治家を失った。1878年（明治11年）西郷を師匠としていた明治天皇（1852-1912）から北陸・東海の巡察への同道を求められた。西郷に育てられたと語った天皇は、大山に西郷との同質性を感じたのか、今後は西郷の代わりにすると述べ、後の大正天皇（1879-1926）の御養育係に任命した。大山は1880年（明治13年）には陸軍卿となり、第一次伊藤内閣において最初の陸軍大臣となった。日本の軍事政策に大きく関与した大山であるが、1882年（明治15年）最初の妻を産褥熱で失った。大山の妻は沢子（1858-1881）と言い、友人吉井の長女である。沢子は1877年（明治10年）に長女信子、1878年（明治11年）に次女美津（この子はすぐに死亡）、1880年（明治13年）に三女芙蓉子、1882年（明治15年）に四女留子を生んだ。女の子ばかり4人の大山はもう最後にするとのことで留子と名づけたという。しかし、四女出産後、沢子は産後の体調回復が思わしくなく、ドイツから招聘されていたベルツ教授の治療の甲斐なく死亡した。

生まれたばかりの子供を含め3人の子を育てなければならない大山に同情した友人の吉井は、大山に再婚を進めた。沢子の父である吉井は大山にとって義父である。そこで、大山の了解を得た吉井は、知人であった海軍軍人の瓜生外吉（1857-1937）と繁子との結婚式に参加していた捨松に白羽の矢を当てた。瓜生の妻繁子は、梅子や捨松とアメリカ留学を果たした生涯の友人であった。早速、吉井は大山に捨松の写真を見せて再婚相手として推薦した。吉井から捨松の家柄について説明を受けた大山は、自身が戊辰戦争時、大砲を打ち込んだ会津の家老の娘であることに驚いた。であるならば、薩摩の大山に憎しみを抱いているに違いないと感じた。しかし、写真で見える限り、その美貌と知性は非常に魅力的であった。捨松の長兄浩（大蔵改め）に大山との縁組について打診したのは吉井である。当時、陸軍大佐であった浩からはにべもなく断られた。戊辰戦争での会津と薩摩との立場から考えても、また、陸軍大臣の大山は上司であり、他から、妹と大山陸軍大臣との結婚は、自身の立身の為と思われかねなかったからであった。幾たびか、断られた大山は、捨松に直接あってみたいと考えるようになった。大山は、外国大使のレセプションに捨松が参加すると知り、自身でその場所に赴いた。その積極性に根負けした浩は陸軍を辞職し、妹との結婚を了承した。

先述したアリスに宛てた手紙の通り、捨松自身、十分に熟慮した上での決定であったろうが、大山と捨松は、沢子の一周忌が明けた1883年（明治16年）に結婚した。大山41歳、捨松23歳で18歳も年の差があった。若くしていきなり3人の母親となった捨松は、長女の信子と乳飲み子であった留子からは慕われたが、三女の芙蓉子は幾分か敵意を示すことがあった。夫婦間という事では、結婚後の捨松は大山との間に男子2人（隆・浩）にも恵まれ、先妻の子の養育も含め、家庭は平穏で幸せな日々を過ごした。何事に対しても凡庸で寛大な大山は西洋風の感覚を持っていたのか、捨松が社交界デビューをしたり、ボランティア活動をしたりするといった行動を制限することはなかった。1893年（明治26年）長女信子は16歳で、銀行家三島弥太郎（1867-1919）と結婚、1年で結核に罹患して実家に戻され、悲しみの中で夫に会う事もできず、そして離縁された。信子への捨松の対応等も含め、社交的で外交的な捨松に対しての国の不満や愚痴は、外部にも知れることになり、後に捨松に大いなる苦悩を与えた。

1884年（明治17年）大山は陸軍卿として、陸軍軍人将川上操六（1848-1899）・桂太郎（1848-1913）らを従え、欧州兵制視察のために横浜を出発し、1885年（明治18年）帰国した。1894年（明治27年）に勃発した日清戦争では陸軍大将として第2軍司令官となった。1899年（明治32年）、再び参謀総長に就任し、

元帥に列せられた。1904年（明治37年）に日本とロシアの間に引き起こされた日露戦争では、元帥陸軍大将として満州軍総司令官を務め、日清・日露ともに日本の勝利に大きく貢献した。海軍元帥の東郷平八郎（184-1934）と並んで“陸の大山、海の東郷”と賞賛された。大山は従兄弟の西郷同様大柄で肥満体であり、その体型と顔の印象から親しい者達からは“ガマ坊”とか“ガマガエル”とか呼ばれていた。どこか、ゆったりとした風貌は緊張感のある戦場でも緊張を和らげる力があつたようだ。大山は日頃、「一軍の将たるものどんなに辛いことがあっても、笑顔でその辛さを包み込まなくてはならない。」³⁷⁾と述べていた。若い者を心配させまいとして、知っていることも知らん顔をしなければならず、苦しくとも苦悩の表情を見せない大山は継母として苦しむ捨松の心情を理解しつつも、同様に知らん顔をし続けたようだ。

時は大正時代に入り、大山は山縣有朋（1838-1922）・井上馨（1836-1915）・松方正義（1835-1924）と共に4人の元老のうちの1人となった。元老の職も天皇からの直接の命令なので断らなかったが、軍人が政治に身を置くという事を西郷同様、良しとしていなかった。元老の役割は未熟な政府を補完する役割を持っていると考えていた大山は、当時の国難について山縣に初めて大声を上げたと言われている。病に倒れた大山は痛みに苦しんだが、「兄さあ」と呼ぶと、それまでの苦悶の表情が嘘のように柔和になった³⁸⁾。傍にいた捨松は大山が西郷に会えたと感じた。1916年（大正5年）大山は永眠した。薩摩の下級武士として戦いに参戦してから最後まで国家のための戦いにその身を捧げた人生であった。ちなみに“君が代”という国歌は大山が作詞したという事³⁹⁾であるから、大山の天皇崇拜・愛国主義はひとしおであったと考えられる。

2. 継母の苦しみ

先述したように捨松が23歳で結婚した時、大山は41歳、3人の子持ちであり、捨松はいきなり3人の子の母親となった。大山が男手一つで子育てをしている間、大山の実姉の国が子供たちの世話や家事を取り仕切っていた。国は世話好きであったが、伝統的な古いしきたりの中からはみ出さない人物だったようで、家庭内の狭い空間の中で時折、活動的な捨松に悪い印象を持っていくようになった。

結婚後、捨松は大山との間に男子2人（隆・浩）にも恵まれ、家庭は表面上、平穏で幸せな日々のように思えた。何事に対しても凡庸で寛大な大山はアメリカ風の感覚を持つ、捨松の行動を制限することはなかった。しかしながら、鹿鳴館の花として上流社会に君臨した捨松もまた、上流であるが故の非難と苦しみを味わった。

1893年（明治26年）長女信子は16歳で、銀行家三島弥太郎（1867-1919）と結婚、1年で結核に罹患したとのことで実家に戻された。そして夫と話し合える術もなく一方的に離縁された。外交的で活発な中に在って捨松は、家内の事も諸事万端整えていると考えていたが、実際、信子の離婚という事実が継母としての捨松を苦悩に陥れた。徳富蘆花（1868-1927）の小説『不如帰』は捨松一家がモデルであったことが明らかだったからである。蘆花は人道主義的情熱と強烈な個性を持つ小説家として知られるが、大山家のある程度の内情を知った蘆花が信子を憐れんだ上での作品なのか捨松には大層悪意が感じられる。後述するが、蘆花夫人は大山家を訪問したことがあり、この時、引率の捨松の実姉かもしくは国からか大山家の内情を知り得ることがあり、夫に大山家の内情を伝えたと考えられる。不如帰（ホトトギス）の主人公浪子は大山家の長女信子を意味した。不如帰という鳥は、鳴いて血を吐く鳥として考えられ、結核を患っていた信子を象徴している。大山は当時陸軍中將であり、小説の中では片岡陸軍中將、三島家は川島家、そして弥太郎は武男として描かれた。偽名にはなっ



画像2 著作『鹿鳴館の貴婦人大山捨松』より

ているが推測しやすい名称である。更に、小説の中で捨松は浪子の意地悪な継母として特別に強調されて登場する。捨松は急進的で知的、外国語をとうとうとしゃべり、夫も手を焼く活動的な女性として描き出された。この物語は国民新聞に連載された後、映画や演劇として上映されたから全国的に知れ渡ることとなった。

以下は不如帰の内容である。

幼くして母を亡くした浪子は冷たい継母、優しい父片岡陸軍中將のもとで18歳になったが、川島家の若い当主武夫と結婚した。夫との夢のような新婚生活中、夫が遠洋航海に出て、気難しい姑川島未亡人につかえた。夫の帰還後、ふたたび幸せな生活を過ごす、結核にかかり、逗子に転地した。しだいに回復するところに、浪子に恋していた男が失恋のはらいせに、川島未亡人に伝染病の恐ろしさ、家系の断絶を言い立て、武男の居ない間に浪子を離縁させる。武男が知ったのは、日清戦争開戦間際であった。母親と争う時間もないまま、武男は戦場にむかう。浪子の病気は帰京してますます重くなり、伯母で仲人の夫人に武男あての遺書を託して、月見草のように淑やかな生涯を終えた⁴⁰⁾。

小説の中では武男は妻に対してひたむきな愛を貫く男性として描かれ、浪子とは相思相愛で寄り添うことのできないのを悲しむ。そして、浪子は結核で療養中夫に離縁され、悲しみの中で血を吐いて死亡したという内容である。

実際に看護師としての教育を受けていた捨松は、結核という病気が感染性の病気であることに対して熟知していたであろう。結核に罹患し、離縁された長女信子のために自宅の離れに家を立て、信子を保養先から引き取った。その上、小さな姉妹にその場所には行かないようきつく戒めたのである。こうした行為は、国や身近で無知な人たちからは、兄弟の交流をも妨げた意地悪な母親と映ったのであろう。国も子どもたちを憐れんで非情な母親として捨松の悪口を言いふらし、かの高木でさえ、看護を学んだものが感染力の高い結核を病んでいる信子を嫁に出したと悪意のある言葉を三島家に伝え、早く実家に戻すよう進言したとのこと。小説の中で浪子に横恋慕した男が登場するが、まさか、その男のモデルが実はかの高木ではあるまいか？捨松の釈明によれば信子の結婚は捨松が大山と再婚する前から決まっており、彼女が追い出したわけではないと。とかく継母というのは辛い立場におかれる。

小説『不如帰』の巻末には、蘆花夫人の徳富愛子（1874-1947）が、「舎監であった捨松の姉、山川双葉女史に引率されて、大山宅を訪問した時に振袖の令嬢が接待してくれたが、その令嬢が私どもの浪さんであろうとは」⁴¹⁾と書いている。更に、蘆花が『文界思藻』に“女”について「婦人の心は悲哀の庫なり。苦痛の家なり。かれあえてその悲哀を告げず。されどもその心中に深く隠れたる悲哀の念は、あたかも薔薇花中の小虫のごとく、その淡紅の両頬を噛み去るなり（中略）爾（なんじ）が悲哀万斛（こく）の泉、これを斟（くん）で共に泣く者は、それ誰ぞ」⁴²⁾という文章が引用されている。この文章から考えるに悲哀を内に込めた女性の悲哀にいかにか共感できる者も、又悲哀の中にあるとのことであろうか？少なくとも蘆花は作品を通して悲哀の中で耐えている女性を描き出したかったのであろうが、あまりにもモデルがリアルすぎて捨松一家の事であると予測がつくにあたっては、現在にあっては人権問題に発展しかねない作品であったと考えられる。一方では、捨松も又、中傷による悲哀を内に秘めて黙々と自身の生涯を生き抜いた女性であったと考えられる。

Ⅲ. 捨松の時代における日本の伝染病対策と女子教育

捨松の生涯や『不如帰』に見る限り、長女の信子の結婚から離婚に至る過程において現在では考えられない婚家の横暴にも近い嫁の信子に対する取扱いがある。その時代背景から考えると結核の蔓延と国家的な取り組み不足の問題、そして家族制度を採用したわが国の“明治民法”における女性蔑視が背景にあるとも考えられる。

捨松の時代、日本の結核蔓延に対しての現況は十分な衛生行政が行われていなかった。1897年（明治30年）に“伝染病予防法”が制定され、1899年（明治32年）に全国の結核死亡状況を調査した結果、結核死亡数は68,408人であった⁴³⁾。その後、1905年（明治38年）頃から、結核が主として患者の喀痰を媒介して感染すると考えられたため、内務省令で公衆の集まるところに痰壺の設置や痰の消毒、患者の居

住した室内及び身の回りの品を消毒することが義務づけられた。1912年(明治45年)の医界時報⁴⁴⁾にも“結核療養所”問題が掲載されたが、それは結核療養所の設置についての現状報告である。1919年(大正8年)に“結核予防法”が制定され、健康診断の実施や、予防に関することが規定された。その他、人口5万人以上の都市では結核療養所の設置を命じ、感染の恐れのある患者で療養の途がない患者を収容させるようにした。療養所を有する公共団体に対しては国庫補助と生活に困窮する患者には生活保護の道を与えた。結核患者への救済策としての行政的な形式は整ったが、実際、運用ということになると定着するまでに時を有したのである。信子が結核に罹患した時代、回復に向けた治療法はなく“死の病”として忌み嫌われる病気であり、空気の良いところでの療養と隔離しか方策はなかった。つまり、結核に対しては日本国全体が無知であり、有効な治療法を見出せなかった時代である。これは大山家の娘、信子の生命危機状況であり、試練でもあった。そして、一家を支えるべき母親としての捨松の苦悩になったのである。

次に、家族制度の問題であるが、“明治民法”では明らかに家長の権限が大きく、戸主権、いわゆる家父長権制度の中で、家族は、家父長に絶対的服従、そして明民法749条の家長の居所決定権、明民法749条の家長の同意権があり、家族が結婚する場合には、戸主の同意が必要、続けて明民法750条の離籍権や復籍を拒絶する権利、更に明民法735・737・738条の家族の入籍・去家・分家についての同意に関することが規定された。つまり、女性には結婚・離婚・除籍についての選択や意思決定権などはなかった時代であり、著しく男尊女卑の時代の事である。大山家の信子はそうした時代の流れの中で一言の釈明もできず、離縁され、孤独のうちに死亡するという事は、一層悲哀に満ちた人生を送ったことになる。他方、同じ女性でもある捨松は、内にこもった人生というよりはより華やかで自身を主張できる外交的な女性である。

捨松の生涯から考えると、明治維新政府の趣旨は西洋の教育思想を取り入れ、男女平等を主眼としたが、その後、儒教主義思想に転じた日本は男尊女卑の傾向に陥った。捨松たちの渡米目的については先述したが、黒田の生涯史『黒田清隆』⁴⁵⁾は、儒教主義的思想の色濃い武士の性格として、あるいは軍人や政治家としての立志伝である。また、同著では頑固で気難しく堅苦しさのある人物として描写されており、おおよそ、幼き子女のアメリカ留学などという先進的な女子教育進歩的な女子教育思想からは程遠い。ただ一つあるとしたらそれは同郷の森有礼の影響である。森は、イギリス留学中、哲学者ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer 1820-1903)の影響を受けており、森が日本に家族制度を導入したのもスペンサーの進言による。黒田が開拓長官の職務で渡米した折に、黒田はアメリカ弁務公使であった森と会っている。そして森は「女子は所謂教育の母にして邦家隆替の源、實に此に發すればなり」⁴⁶⁾と述べ、彼に女子教育の必要性を説いたと記述されている。邦家隆替とは国家が栄えることを意味する。また、森は弁務公使としての役割として日本人留学の促進と共に、留学生たちの教育を行い、真に自立した日本国民の育成を目指したとされる⁴⁷⁾。ゆえに、黒田の幼き子女のアメリカ留学についての進言は、森の影響が大きいと考えられる。

初代文部大臣であった森は徹底した良妻賢母主義であり、女子教育に関しては“学制”の頃の理念のように良妻賢母という形で積極的であった。彼が1888年(明治21年)の学事巡視の際に述べた女子教育に関する見解は「夫レ女子ノ天然ノ教育トシテ、教育上大切ナル地位ヲ占メ、其児童ヲ引受クル者ナルガ、其之ヲ教育スルニ方リテ、教育ノ要点ナル国家ノ独立ト云コトヲ、其腦中ニ記憶シ、以テ児童ヲ薫陶セザルベカラズ、サレバ女子ハ常ニ此精神ヲ以テ、女子ト雖モ、国家ノ為ニハ、身命ヲ捨ザル可ラズトノ覚悟ヲナシ、而シテ其引受ノ児童ニ対シテハ、国家ノ為ニハ命ヲ致タスノ義心ヲ養成セザルベカラズ」⁴⁸⁾というものであった。彼の主張は、女子は子供を教育する自然が与えた役割があり、子供を教育する際には常に国家の事を中心に考える子供になるように教育するべきである。女子であっても国家の為には命をも捨てる覚悟を持つように教育されるべきであるというものであった。それは女性を職業婦人として教育しようというのではなく、また、さりとて、個人としての人格の陶冶といったものでもなく、国家を強固にするために母親になる女性を教育して行かねばならないといったものであった。従って、黒田が幼き子女をアメリカに留学させた理由には、将来の子供たちを育成する母親がしっかり教育されなければ良い子は育たないという良妻賢母主義思想と同時に女子であっても国家に挺身する構えの思想

があったと考えられる。

女子が男性同様、職業を持って社会に貢献するといった女子教育思想は例えば、自由民権運動家の植木枝盛（1857-1892）に見られる。1889年（明治22年）、植木は『東洋の婦女』を著し、その序文に「19世紀の問題は女子の問題なり」⁴⁹⁾ という意見他、多くの意見を取り入れながら、「爰（ここ）に人間社会に取りて、最も大なる事、最も大なる事にも関はらず、天理に悖（もと）り、人彝（い）に違い、道徳を潰し、文明を傷け、人を誤るの最も著大なるものを何とかするや問ふものあらん。……曰く、男尊女卑の一事是なり、男女不同権の一事是なりと。」⁵⁰⁾ と述べ、日本における“三従の教え”について詳細に述べ、その是非について論述している。彼の主題となっているものは、ジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill 1806-1873）が述べたような“男女同権”の原理に即しており、女性に職業を持たして自立させるべきであるとの主張を行っていた。その上で、植木は著作の中で日本における男尊女卑の傾向を指摘し、こうした男尊女卑の傾向を封建社会と戦国社会が助長させ、儒教や仏教がこの風習を増長させたとして述べている。従って彼は男尊女卑の傾向を改める為に、女性にも学問を与えて品性を高め、経済的に自立するために職業を持たせるべきであるという主張を行った。

他方、西洋式の流儀に倣って行われる女子教育は質素、勤儉を旨とした日本固有の伝統的な教育観を持つ人達にしてみれば、恐ろしく華美で悪風俗に思えたのかもしれない。この西洋一辺倒の女子教育に批判を加えたのが天皇の待講である西村茂樹（1828-1902）である。彼は女性にも男性同様に教育を与えることについては認めているが、徳育をおろそかにしたことなどを上げて、その教育法の欠点を指摘している。彼は女子道徳の向上の為に皇后陛下の命によって『婦女鑑』⁵¹⁾ を編集し、1887年（明治20年）に出版した。同著には、一般社会における婦人の行儀が著しく損なわれているから、その教育のために西洋及びわが国の模範となるべき女性の伝記を編集したと書いている。『婦女鑑』というのはその名の通り、女性の模範（モデル）として秀でた女性のことを言う。『婦女鑑』には日本女性では紫式部や貧民女性の孝行の話、二代将軍徳川秀忠（1579-1632）の乳母や吉宗（1684-1751）の母親等、立派な子供を育てた母親として、あるいは夫を立派な武将として支えた妻の話などが一つの語りとして編集されている。外国人では中国の妃の話、囚人の待遇改善に尽力したエリザベス・フライ（Elizabeth Fry 1780-1845）女史なども紹介された。

西村は1889年（明治22年）、「日本の婦人の知恵いかがありしか、其婦人の智徳が社会に及ぼす所の影響いかがありしか、大抵これを知らず、ひたすらに西洋人を神聖視するよりして、西洋人の著はせる書籍上の議論は勿論のこと、其他西洋民間の風俗習慣の如きも、見るがままにこれを尊重し、是を以て日本女子の模範と為さんと欲す」⁵²⁾ のはいかがなものかと述べている。彼は1884～1885年（明治17～18年）頃にこの風潮が佳境に達したと述べ、婦人の風俗上に幾多の弊害をもたらしたと述べている。明治17・8年頃といえば、婦人慈善会が鹿鳴館でバザーを開催した頃である。猿真似とまで言われた西洋風の服装や流儀は、背の低い日本子女にはそぐわないものであり、そこには悲哀さえ感じられたという。西村はそうしたことに批判を加えたのであろう。更に彼は「男女同権といふは如何なることを指したるものか甚だ了解しがたし」⁵³⁾ と述べたが、権とは威権のことか権理のことか分明ならず、これら両者は同じ意味は持たないと男女が同権であるという主張にも反論を行っている。

捨松の時代に象徴される鹿鳴館時代、この国家体制による理念が女子教育に影響を与えないわけがない。1883年（明治16年）に開館した西洋風な建物、上流社会の交流の場、派手な衣裳で夜毎繰り返される晩餐会といった西洋式の交際の仕方は国民の目には、一層うわついたものに映ったかもしれない。今まで奥むきの仕事だけが女性の役割であったのが、男性と共に社交の場にて行く女性達に対して批判の目が注がれても不思議ではない。つまり、捨松は日本初の官費留学生として日本のために役立つことをしたいと願い、内にあっては良妻賢母として、外にあっては社交的で優雅であり、アメリカで普段に行われているボランティア活動を行ったりしたことは、日本にはそぐわない行動であったとの非難を内外から受けたという事になる。ナイチンゲールが、看護教育を推進したことによって実質的に女性を社会に解放し、従来からある伝統的な女性像を覆したことで知られるが、彼女は、「優れた看護師は優れた女性」⁵⁴⁾ であると述べ、優れた女性は「その知性（intellect）、倫理（moral activity）、実践（practice）において最上のものを患者に惜しみなく与える女性である」⁵⁵⁾ と述べた。捨松も又、その行動でもって

優れた女性として、ナイチンゲールが求めた、知性・倫理的行動・情熱を有した女性であったと考えられる。

おわりに

本論では、明治期初期の政治・経済的な動乱の時代にアメリカ留学を果し、看護教育の推進に大きな助力をした大山捨松の生涯を概観し、その生涯を通して当時の伝染病対策や女子教育思想について検討した。日本初の官費留学生であった捨松は、出発前に皇后から授かった言葉を胸に日本の女子教育の未来に役立つ女性になりたかった。ところが日本の女子教育も大きく後退し、学制の頃の男女平等の教育の気風は薄れ、むしろ、儒教主義思想による男女別教育が推進されていた。アメリカ留学の時とは違う日本のお国事情がそこにはあった。日本の女子教育に役立ちたいと考えていた捨松は、縁あって看護の教育を受け、帰国後に結婚した夫の職業柄、傷病兵の看護に関心を持ち、兵士たちの家族の心配をしたりする為の組織作りまで行った女性であった。つまり、捨松は日本初の官費留学生として日本のために役立つことをしたいと願い、内にあっては良妻賢母として、外にあっては社交的で優雅であり、アメリカで普段に行われているボランティア活動を行ったりしたことは、日本にはすぐわない行動であったとの非難を内外から受けたという事になる。更に、大山夫人としては長女信子の結核罹患と当時の伝染病対策と治療の遅れは、一女性の生命と生涯を左右する問題であり、『不如帰』における悪意や中傷的な物語は、読み手の涙を誘う武夫と浪子の切ない物語であり、全国津々浦々に広められた。広まれば広まるほどに捨松に対する悪感情は拡散されるものであり、小説とは言え、明らかに大山陸軍大臣と再婚相手の捨松がモデルであると明瞭になるほどの内容である。継母捨松が体験した胸の痛みはいかばかりであったろうか。

又、夫の大山巖は、薩摩の下級武士として戦いに参戦してから最後まで国家のための戦いにその身を捧げた人物であった。ちなみに“国家君が代”は大山が作詞したという事であるから、大山の天皇崇拜・愛国主義はひとしおであったと考えられる。そうした夫の考えを理解したと考えられる捨松は、夫が外地で従軍中、看護教育普及も込めて、病院での活動を積極的に展開し、あくまでも良妻賢母主義思想の中で良き妻・良き母として生き抜こうと努力した女性である。また、わが国の看護教育設立に多大な貢献をしており、日本女性としては非常に知的で活動的な女性であった。大山陸軍大臣を中心に経験した日清・日露戦争での大多数の犠牲を、彼らは勝利とみなしたのか？その後、日本が歩んだ第二次世界大戦までの道のりにおける決断は後の人にその評価が任される。戦争同様、単に西洋かぶれ、社交的、活動的、継母というレッテルを貼り、他者を貶める行為は慎んでいかなければならない問題であろう。

アメリカの外科医、シーマンの著作には、維新後の日本の戦争を見聞した記録史であると同時に、日本の医療の歴史を仏教伝来の時期から詳しく記述し、戦争中の野戦病院、日本の医療状況、脚気（beriberi）等についても論じ、戦死者数や、病名や病人の数、病死者数と率にも言及している。日清・日露戦争ともに勝利をした日本ではあるが、その闘いの中で、病氣や飢えや寒さで死亡した兵士たちの事に思いを寄せていたか、シーマンによれば日本軍はいわゆる皇国の気持ちの高さと武士道精神によって支えられていたと論じる。しかしながら、戦意はともかくとして、戦時下における医療の質は、戦力に大きな影響を与えることはたしかであろう。

人が過去に遭遇したある経験は一つの学習であり、その知性的側面は次に引き起こされる困難な状況に対処するのに役立つ。それは前の経験の結果を基礎として行動を修正する力、性行を発達させる力を有するからである。つまり、我々は経験（学習）することから学習する。軍関係者や人々の生存の問題は、国民の健康ニーズであり、国家が保障しなければならない正当な権利である。日本も先に体験した戦争からの学びを忘れることなく、いつの時代に有っても平和への道を模索し続けることが肝要である。

注

- 1) 佐々木秀美著：ナイチンゲールーイギリス陸軍を改革するー学習（経験）したことから学習せよ、

- 看護学統合研究 Vol.13, No.1, pp29-48, 2011年.
- 2) Louis Livingston Seaman : The Real Triumph of Japan, D. Appleton and Company, 1907.
 - 3) 久野明子著：鹿鳴館の貴婦人大山捨松，中公文庫，1997年.
 - 4) 阿井景子著：情愛―大山夫人伝，光文社文庫，2012年.
 - 5) 三戸岡道夫著：大山巖，PHP 文庫，2000年.
 - 6) 吉川利一著：吉川利一著：津田梅子，pp23-25，中央公論社，1990年.
 - 7) 新開雑誌，1871年（明治4年），11月2日.
 - 8) 吉川利一著：前掲書6），p21.
 - 9) Harriet Martineau : British History and Military Reform, vol.6, England and her Soldiers, p304, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
 - 10) Harriet Martineau : 前掲書9），p305.
 - 11) Josephine A. Dolan (1973) : Nursing in Society, (小野泰博他訳：看護. 医療の歴史, pp250-251, 誠信書房, 1978年.)
 - 12) Harriet Martineau : 前掲書9），p304.
 - 13) Josephine A. Dolan (1973) : 前掲書11），p254.
 - 14) Published under the direction of the Connecticut training - school for nurses : The Hand Book of Nursing, State Hospital, New Haven, Connecticut, / London : J. B. Lippincott & Co. 1880.
 - 15) 久野明子著，前掲書3），p181.
 - 16) 久野明子著，前掲書3），pp214-215.
 - 17) Josephine A. Dolan, (1973) : 前掲書11），pp274-276.
 - 18) 久野明子著，前掲書3），p160.
 - 19) 呉海軍病院史編集委員会：呉海軍病院史，p51，2005年.
 - 20) 久野明子著，前掲書3），p277.
 - 21) Louis Livingston Seaman: 前掲書2），p19.
 - 22) 高木喜寛著：高木兼寛伝，三秀社，1922年.
 - 23) 松田誠著：高木兼寛伝，講談社，1990年.
 - 24) 倉迫一朝著：病気を見ずして病人を見よ―麦飯男爵高木兼寛の生涯―，鉾脈者，2000年.
 - 25) Florence Nightingale (1860) : Note on Nursing, Scutari Press, 1992.
 - 26) Charles Singer and E. Ashworth Underwood, A Short History of Medicine (1962), Oxford University Press, (酒井シヅ・深瀬泰旦訳：医学の歴史3，p612，朝倉書店，1996年.)
 - 27) 慈恵看護教育百年史編集委員会編：慈恵看護教育百年史，p17，東京慈恵会，1984年.
 - 28) Florence Nightingale (1863), Note on hospital, (湯楨ます他訳：病院覚え書，ナイチンゲール著作集第二巻，現代社，1983年.)
 - 29) 大久保利謙著『森有礼全集』第3巻，pp273-277，宣文堂書店，1972年.
 - 30) Published under the direction of the Connecticut training - school for nurses : 前掲書14），p14.
 - 31) Elizabeth M. Jamieson, Mary F. Sewall, Eleanor B. Suhrie, Trend in Nursing History, W. B. Saunders Company, 1966.
 - 32) 富田 仁著：鹿鳴館―擬西洋化の世界―，白水社，1988年.
 - 33) 富田 仁著：前掲書32），p63.
 - 34) 磯田光一著：鹿鳴館の系譜，磯田光一著作集5，p108，小沢書店，1991年.
 - 35) 三戸岡道夫著：前掲書5）.
 - 36) 三戸岡道夫著：前掲書5），p159.
 - 37) 三戸岡道夫著：前掲書5），p419.
 - 38) 三戸岡道夫著：前掲書5），p448.
 - 39) 三戸岡道夫著：前掲書5），p112.
 - 40) 徳富蘆花著：不如帰，岩波文庫，1992年.

- 41) 徳富蘆花著：前掲書40), p229.
- 42) 徳富蘆花著：前掲書40), p228.
- 43) 菅谷明著：日本医療制度史, p32, 原書房, 1978年.
- 44) 医海時報第935号, 1912年(明治45年) 5月25日.
- 45) 井黒弥太郎著：黒田清隆, 吉川弘文館, 2009年.
- 46) 木村 匡著：森先生伝, p65, 大空社, 1987年.
- 47) 犬塚孝明, 石黒敬章共著：明治の若き群像－森有礼旧蔵アルバム, 大空社, 2006年.
- 48) 片山清一著：近代日本の女子教育, pp55-56, 建帛社, 1881年.
- 49) 植木枝盛著：植木枝盛集, 東洋の婦女, p192, 岩波書店, 1990年.
- 50) 植木枝盛著：前掲書49), p219.
- 51) 西村茂樹著：婦女鑑, 宮内省, 1887年.
- 52) 日本弘道会編：西村茂樹全集, 『女子教育論』, p353, 恩文閣, 1978年.
- 53) 片山清一著：前掲書48), p 356.
- 54) Florence Nightingale (1888) : To the nurses and probationers trained under the “Nightingale Fund”, (湯楨ます他訳：ナイチンゲール著作集第三巻, 看護師と見習い生への書簡, p430, 現代社, 1985年.)
- 55) Florence Nightingale (1888) : 前掲書54), pp430-431.